

論述課題

① 本文を 400 字以内で要約しなさい。

② 600 字以内で筆者の「教養」概念に対して、賛成か、反対か、まず結論を示し、その理由を論じなさい。

①要約

「いかに生きるか」という問いが実質的な意味をもったのは、十二世紀になってのことであった。このころに都市が成立し、そこで新たな職業選択の可能性が開かれたからである。これが教養の始まりであった。この答えはローマ末期のラテン語の文献に求められた。この結果教養概念は古典語と結びつき、多くの書物を読み古今の文献に通じていることとなった。しかし、歴史的にたどれば、この教養概念は個人の教養にすぎまい。「いかに生きるべきか」という問いを立てる必要なく人生を送っていた数多くの人々のことを考慮に入れて教養概念を立てるとすれば、「自分が社会の中でどのような位置にあり、社会のために何ができるかを知っている状態、あるいはそれを知らうと努力している状況」ということにな

る。これは文字で表わされたものではなく、人々が身体で知っていたものであり、集団の教養というべきものである。(378字)

②反対論の例

筆者の意見に反対である。

第一に、筆者の「教養」概念からすれば、例えば、サル社会の一員は「自分がサル社会の中でどのような位置にあり、サル社会のために何ができるかを知っている状態、あるいはそれを知ろうと努力している状況」にあるのであり、サルにも「教養」があることになる。しかし、これはサルの「知恵」と呼ぶべきものである。同じように、筆者のいわゆる「教養」概念は人類の「知恵」というべきものなのである。そして、人類成立以来の伝統的な生活態度の評価が「人類の知恵」という概念によってなされうるとすれば、「教養」概念をその評価のために拡張すべき必要はない。

第二に、「教養」という概念は、筆者の指摘するように西欧の中世末期の都市生活者の中から生まれた概念である。それは、人類成立以来の伝統的な生活態度とは量的質的に異なる積極的学習行為と知識の

習得を前提とする概念である。その意味で生来的に狭義の差別的な概念である。しかるに、この概念をこの概念の被差別領域まで拡大するというのは、この概念を殺すことを意味するものである。それはサルも人間と同列に扱いたいから「人間」という概念をサルにまで拡張すべきだというようなものである。

(495字)

②賛成論の例

筆者の意見に賛成である。

まず、教養概念は西欧の特定の時代に成立した個人の教養を念頭に置く概念である。これはそのような教養を身につけることのできた特権的な人々のみが持ち得た概念である。その意味で一種の差別的な概念である。すなわち、この概念を狭義に解すると、農業などの伝統的な職業に従事してきた人々は、教養のない人々ということになり軽視ないし無視されることになる。

しかし、このような人々は常に社会に存在してきたのであるし、「自分が社会の中でどのような位置にあり、社会のために何ができるかを知っている状態、

あるいはそれを知らうと努力している状況」にあったのである。したがって、歴史上の存在価値が教養のある人々よりも低いわけではない。ただ、文字による「教養」を持たず、それゆえ、無名であったというだけである。

そこで、これらの無名ではあるが歴史を支えた人々を、歴史的評価の外に置き去りにしないようにするためには、教養概念を筆者のごとく「自分が社会の中でどのような位置にあり、社会のために何ができるかを知っている状態、あるいはそれを知らうと努力している状況」にまで広げるのが妥当である。

(491字)

(阿部謹也『「教養」とは何か』を素材にした)